

令和7年度試験問題  
後 期 日 程  
学校教育教員養成課程  
教育発達専攻

専 修 名	科 目 等	ペ ー ジ
特別支援教育専修	小 論 文	P. 1 ~ P. 5

注 意

1. 問題冊子及び解答用紙は指示があるまで開かないこと。
2. すべての解答用紙の※印のついた箇所に受験番号を記入すること。(合計点欄に記入してはいけない。)
3. ページ数に間違いがないかよく調べること。
4. 下書用紙を利用することは差しかえないが、答えはすべて解答用紙に記入すること。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書用紙は持ち帰ること。

I 次の文章を読み、筆者の子どもの見方・とらえ方に対するあなたの考えを述べなさい。

(800字以内)〔配点150点〕

ボクは子どもを「ちびっこ」というようないい方でいうのが嫌いです。

子どもも大人もおんなじという考え方が人生の基本になっています。大人は子どものなれの果てですから、精神が少し汚れ、経験がいくらか豊富という程度で、さしたる差はありません、それどころか子どもはむしろボクの師です。

子どもの詩や絵にはいつも心を洗われることが多く、心から尊敬しています。すべての子どもたちはボクの先生です。

ただ人生経験が少ないから、この世の慣習に慣れていない部分があり、時として野蛮で時として荒々しく、洗練されていないのはいたし方のないことで、その部分で子どもをみくびってしまうのはまちがいです。ボクはいつも子どものように感じ、子どものようにかきたいと願っています。残念ながら、もう眼が汚れてしまったので、どうしても子どもには負けてしまいます。

童謡をつくる時、いかにも子どもっぽく甘くつくるひとがいます。それが童謡だと思っているようですが、ボクはそれはいくらかあやまりと思うのです。子どもは大人にあこがれていて、いつも大人のようにふるまいたいと思っていますし、心の中はさしてちがいません。

なぜ、そういうことをいってるかというと、ボクは子ども時代に「赤いべべきたかわいい金魚」というような歌をうたうのが、どうも恥ずかしくてたまらなかったのです。

いってみれば、ボクはにくらしい子どもだったのですが、しかし大部分のひとは自分の子ども時代に、ちゃんと大人の世界のことがわかっていたことを思いだすはずです。つまり、大人の世界の嘘の部分が変わりとはっきりわかっているのに、見て見ぬふりをするのです。子どもは子どもの世界から踏みだすことはできないので、何もいわずにいるだけです。愛の哀しみよろこび、美しいとかみにくいか、お金持ちとか貧乏とか、世の中の不公平さについて既によく

知っています。

たとえば五歳ぐらいでも三角関係の愛のもつれなどということははじまりません。ボクは子どもの詩をたくさん読んでその選者をしていましたが、恋は既に三歳ぐらいからはじまることを知ってショックを受けました。

その中の一篇をここに書いておきます。

しずえちゃん                      こうむら よりし（五歳）

ぼく いやだったよ  
にげようとしたけど  
みよちゃんが  
ぼくのほっぺに  
キスしちゃったよ  
「みよちゃんと  
けっこんしなさい」って  
しずえちゃんが いうんだよ  
いやだなあ  
ほんとは ぼく  
しずえちゃんを  
あいしているんだよ

五歳でも好きでもないひとと結婚しなくてはいけないという悲しい運命に泣くのです。大人はひとつの自分の郷愁の中に子どもをおきたがる。かわいらしく純真であどけない、その色の中に子どもをぬりこめてしまおうとするのです。でも、子どもにとってはそれは時には迷惑ではありませんか。

だから、ボクは子どもに対する時は大人に対する時よりも、もっと一生けんめいにひとつの人格として認めることにしています。

ボクは子どもの絵本、子どもの歌、子どものミュージカル、童謡等の仕事を

多くしていますが、どんなにグレードを下げても、心の中では大人に見てもら  
うつもりで決して甘やかさずにつくっています。いくらか難しい部分があつて  
も、心ある子どもにはかえってそのほうが面白いのです。

ただ表現や文字については、やはりまだそんなにたくさん知りませんから、  
やさしくしますが、内容はしっかりとつくります。つくりますというよりも、  
つくっているつもりです。なにしろ、さしたる才能に恵まれていませんから、  
必死になってつくっても、「なんだ、これは」ということもあるのは実に困っ  
たものです。

出典：やなせたかし 『ボクと、正義と、アンパンマン』（一部改変）

\* このページは白紙です。

Ⅱ 人間関係において「折り合いをつける」ことの大切さについて、自身の経験を踏まえてあなたの考えを述べなさい。

(600字以内)〔配点150点〕